２０１６年度センター試験　簿記・会計【解説】

第１問

Ａ　取引の記帳に関する問題。

(1)　商品の販売代金の未収額を、後日、受け取る権利をあらわすのは「売掛金」である。
なお、有価証券や固定資産の売却など、主たる営業活動でない取引で生じた債権をあらわすのは「未収金」である。

(2)　「商品券」を発行した場合、その金額に相当する商品を引き渡す義務が発生する。
他店が発行した商品券を受け取った場合は、その金額に相当する商品を受け取る権利が発生し、それは「他店商品券」で処理する。

(3)　借用証書による金銭の貸し借りから生じる債権をあらわすのは「貸付金」である。 債務をあらわす場合は「借入金」で処理する。また、借用証書の代わりに手形を振り出して金銭の貸し借りを行う場合は「手形貸付金」または「手形借入金」を用いる。

(4)　すでに費用として支払った金額または収益として受け取った金額のうち、次期以降に属する分を当期の費用または収益から除外する修正を繰り延べという。また、まだ費用として支払っていない金額または収益として受け取っていない金額のうち、当期に属する分を費用または収益として計上する修正を見越しという。

(5)　評価勘定には貸倒引当金の他に、固定資産に対する減価償却累計額勘定、資本金勘定に対する引当金勘定がある。

第１問　Ａの解答

ア	イ	ウ	エ	オ
0	2	0	2	3

B　個人企業である徳島商店の、取引の記帳に関する問題。

・資料１の仕訳は次のとおりである。

4 日：(借) 売 掛 金　80　(貸) 売　上　80

6 日：(借) **現　金**　200　(貸) 売　上　200

※資料２の現金勘定より、4/6 の仕訳の借方は現金であることが分かる

8 日：(借) 通 信 費　40　(貸) 現　金　70

租税公課　30

13 日：(借) 仕　入　210　(貸) 買 掛 金　200

現　金　10

17 日：(借) 備　品　300　(貸) 当　座　100

未 払 金　200

20 日：(借) 租税公課　60　(貸) 現　金　60

25 日：(借) 現　金　100　(貸) 前 受 金　100

28 日：(借) 買 掛 金　220　(貸) 当　座　220

※資料２の買掛金勘定より、金額は¥220 であることが分かる

30 日：(借) 売 掛 金　**130**　(貸) 売　上　**130**

※資料２の売掛金勘定と売上勘定より、金額は¥130 であることが分かる

・資料１をもとに転記すると、資料２の総勘定元帳は以下のようになる。

現　金

4/1	前月繰越	220	4/8	**諸　口**	**70**
6	売　上	200	13	**仕　入**	10
25	**前 受 金**	**100**	20	**租税公課**	60

当　座

4/1	前月繰越	200	4/17	備　品	100
			28	買 掛 金	**220**

売 掛 金

4/1	前月繰越	250			
4	売　上	80			
30	売　上	130			

備　品

4/1	前月繰越	300			
17	諸　口	300			

買 掛 金

4/28	当　座	220	4/1	前月繰越	190
			13	仕　入	**200**

前 受 金

			4/25	現　金	100

未 払 金

			4/17	備　品	200

売　上

			4/4	売 掛 金	80
			6	現　金	200
			30	売 掛 金	130

仕　入

4/13	**諸　口**	**210**			

通 信 費

4/8	現　金	40			

租税公課

4/8	現　金	30			
20	現　金	60			

問１.

４日の仕訳：　（借）売 掛 金　80　（貸）売　　上　80

〔資産の増加〕――――〔収益の発生〕

問２.

６日の仕訳 ：（借）現　　金 200　（貸）売　　上 200

選択肢のうち、現金扱いするものは ②先方振り出しの小切手 のみである。

問４.

２８日の取引（当座勘定を用いない方法）

（借）買　掛　金 220　（貸）当 座 預 金 100

当 座 借 越 120

※ 4/17 までの当座勘定の残高は ¥100 であるため、不足分は当座借越で処理する。

問５.

３０日の取引を分記法で仕訳した場合、以下のようになる。

（借）売　掛　金 130　（貸）商　　品 90

商品売買益 40

※ 仕入原価 ¥90 との差額は商品売買益となる。

第１問　Ｂの解答

カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ
2	2	3	1	0	2	2	1	7	9
タ	チ	ツ							
1	2	2							

Ｃ　三重商事株式会社が行った取引に関する問題。

・それぞれの取引の仕訳は以下のようになる。

(1)　（借）当 座 預 金 900　（貸）資　本　金 450

資 本 準 備 金 450

(2)　（借）創　立　費 50　（貸）現　　金 50

(3)　（借）社　　債 80　（貸）未 払 社 債 80

(4)　（借）仮払法人税等 40　（貸）現　　金 40

(5)　（借）有 価 証 券 291　（貸）未　払　金 291

第１問　Ｃの解答

テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
1	4	5	1	2	2	3

第２問

個人企業である山口商店の、取引の記帳に関する問題。

・資料２の仕訳は以下のとおりである。

4 日：(借) 積　送　品　105　(貸) 仕　　入　105
6 日：(借) 未 着 商 品　240　(貸) 支 払 手 形　240
10 日：(借) 売　掛　金　350　(貸) 売　　上　350
　　仕　　入　240　　未 着 商 品　240
※資料３ 10 日の記帳より、売上代金は¥350 であることが分かる。
21 日：(借) 当 座 預 金　100　(貸) 受 取 手 形　100
　　手形売却損　　5　　当 座 預 金　　5
※資料５ 21 の記帳より、手形金額は¥100、手形売却損は¥5 であることが分かる。
24 日：(借) 当 座 預 金　300　(貸) 仮　受　金　300
26 日：(借) 仮　受　金　300　(貸) 売　掛　金　300

・資料３～資料６の各帳簿への記帳は以下のとおりである。

資料３

普　通　仕　訳　帳

平成×５年		摘　　要	元丁	借　方	貸　方
7	4	（積　送　品）	9	105	
		（仕　　入）	31		105
	6	（未 着 商 品）	8	240	
		（支 払 手 形）	11		240
	10	（売　掛　金）	4/売2	350	
		（売　　上）	21		350
	15	（買　掛　金）	12/買1	50	
		（売　掛　金）	4/売1		50
	26	（仮　受　金）	18	300	
		（売　掛　金）	4/売2		300

元丁欄より勘定科目は (借)買掛金 (貸)売掛金 であることが分かる

資料４

現　金　出　納　帳

平成×５年		勘定科目	摘要	元丁	金額	平成×５年		勘定科目	摘要	元丁	金額
7	13	売　　上	青森商店	21	250	7	14	仕　　入	熊本商店	✓	140
	29	当座預金	引き出し	✓	200		30	買 掛 金	熊本商店	12/買1	180
	31		(現　　金)	1	450		31		(現　　金)	1	320
			前月繰越	✓	50				次月繰越	✓	180
					500						500

※相手勘定科目が当座預金のため、資料５の 29 日の記帳より金額は¥200 である

資料５

当 座 預 金 出 納 帳

平成×５年		勘定科目	摘要	元丁	売掛金	諸口	平成×５年		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸口
7	7	売 掛 金	福島商店	**売2**	210		7	12	仕 入	熊本商店	✓		**230**
	21	受取手形	青森商店	3		100		20	買 掛 金	宮崎商店	**買2**	85	
	22	売 掛 金	福島商店	**売2**	100			21	**手形売却損**		38		5
	24	**仮 受 金**		18		300		29	**現 金**		✓		200
					310	400						85	435
	31		（売 掛 金）	**4**		**310**		31		**（買 掛 金）**	**12**		**85**
	〃		預入合計	2		**710**		〃		引出合計	2		**520**
			前月繰越	✓		120				**次月繰越**	✓		**310**
						830							**830**

※資料４の 29 日の記帳より、相手勘定科目は現金であり、元丁欄は✓である

資料６

仕 入 帳

平成×５年		勘定科目	摘要	元丁	買掛金	諸口
7	2	買 掛 金	宮崎商店	**買2**	125	
	3	**買 掛 金**	**宮崎商店**	**買2**	**10**	
	10	**未着商品**		8		240
	12	**当座預金**	熊本商店	✓		230
	14	**現 金**	熊本商店	✓		**140**
		買 掛 金		**買1**	140	
					265	**610**
	31		**買 掛 金**	**12**		**265**
	〃		総 仕 入 高	31		**875**
	〃		**仕入値引高**	12/31		**10**
			純 仕 入 高			865

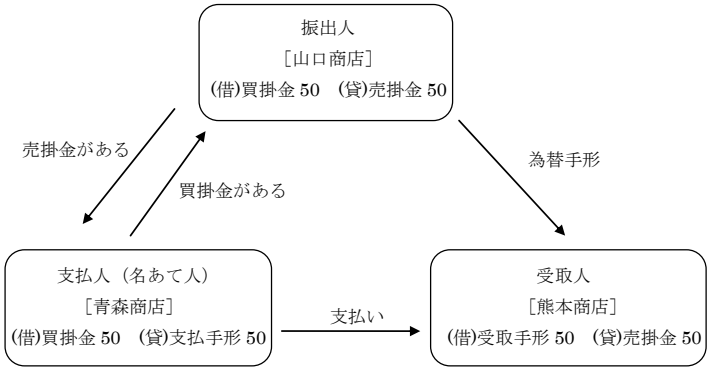
金額が買掛金欄に記入されているため、相手勘定科目は買掛金である。

資料２～資料５のなかで、12 日の取引が記帳されているのは資料５のみであるため、相手勘定科目は当座預金である。

問３．為替手形による名あて人とは、支払人のことである。

（貸）売掛金の元丁欄「売１」より、青森商店への売掛金が減少したことが分かる。

よって、この為替手形の名あて人は青森商店である。



第２問の解答

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
6	c	9	9	1	8	0	b	0	4
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト
8	5	1	1	4	0	2	6	5	b
ナ									
1									

第３問

個人企業である富山商店の、本支店間取引及び決算処理に関する問題。

・資料２の仕訳は以下のとおりである。

	26 日：本店（借）給　料	30	（貸）預り金	2
			現　金	28
※問１	28 日：本店（借）旅　費	10	（貸）支　店	10
	支店（借）本　店	10	（貸）当座預金	10
	30 日：本店（借）支　店	40	（貸）仕　入	40
	支店（借）仕　入	40	（貸）本　店	40
	31 日：本店（借）支　店	50	（貸）受取手形	50
	支店（借）買掛金	50	（貸）本　店	50

・資料３の仕訳は以下のとおりである。

(1)（借）現　金　6　（貸）受取手数料　6

※資料１の受取手数料の残高¥6 → 資料４の受取手数料¥8 より、金額は¥6 である。

(2)（借）仕　入　120　（貸）繰越商品　120

繰越商品　210　仕　入　210

(3)（借）貸倒引当金繰入　21　（貸）貸倒引当金　21

※（受取手形¥400＋売掛金¥200）× 4% － 貸倒引当金残高¥3 ＝ ¥21

(4)（借）減価償却費　45　（貸）備品減価償却累計額　45

※（備品¥300 － ¥30）÷ 6 年 ＝ ¥45

(5)（借）有価証券　4　（貸）有価証券評価益　4

※資料４より、有価証券評価益が ¥4 発生したことが分かる。

よって、資料１の有価証券 ¥170 ＋ 有価証券評価益 ¥4 ＝ 時価 ¥174 である。

(6)（借）前払家賃　90　（貸）支払家賃　90

※ 支払家賃の残高は、10 月に支払った１年分の家賃と、期首の再振替仕訳分の合計である。

再振替仕訳分は ¥8 × 9 ヶ月 ＝ ¥72 であるため、10 月に支払った１年分の家賃は

¥120 である。よって、当期の前払家賃は ¥120 × $\frac{9}{12}$ ＝ ¥90 である。

(7)（借）消耗品　3　（貸）消耗品費　3

※資料１の消耗品費の残高 ¥5 に対して、資料４の消耗品費は ¥2 であるため、

未使用高は ¥3 である。

(8)（借）支払利息　3　（貸）未払利息　3

※借入金 ¥200 × 6% × $\frac{3}{12}$ ＝ ¥3

(9)（借）資本金　20　（貸）引出金　20

(10)（借）支　店　25　（貸）損　益　25

・資料１～資料３より、資料４の本店の損益勘定および繰越試算表は以下のとおりになる。

損　　益

12/31	仕入	1,140		12/31	売上	1,711
〃	給料	340		〃	受取手数料	8
〃	支払家賃	102		〃	有価証券評価益	4
〃	貸倒引当金繰入（貸倒償却）	21		〃	支店	25
〃	減価償却費	45				
〃	旅費	50				
〃	消耗品費	2				
〃	支払利息	3				
〃	資本金	45				
		1,748				1,748

繰越試算表

平成×5年12月31日

借方	元丁	勘定科目	貸方
308	（省略）	現金	
420		当座預金	
400		受取手形	
200		売掛金	
		貸倒引当金	24
174		有価証券	
210		繰越商品	
3		消耗品	
90		前払家賃	
300		備品	
		備品減価償却累計額	180
612		支店	
		買掛金	333
		借入金	200
		所得税預り金	2
		未払利息	3
		資本金	1,975
2,717			2,717

問３.

本店に置ける支店勘定から未達取引整理前の本店勘定、支店勘定の一致額を求める。

¥507	－	¥10	＋	¥40	＝	¥537
支店勘定残高		資料２ 28 日		資料２ 30 日		未達取引整理前一致額

よって、資料２ 30 日の時点で支店における本店勘定の残高は ¥537（貸方残高）となる。

さらに、資料３(10)の支店の仕訳：(借）損益 25（貸）本店 25　より、¥537 ＋ ¥25 ＝ ¥562 となる。

第３問の解答

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
3	1	4	0	2	1	4	3	0	8
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト
7	4	3	9	0	1	8	0	1	3
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ			
9	7	5	5	6	2	1			